

## 安全の哲学

日本医療安全学会理事長/国際医療リスクマネジメント学会理事長  
酒井亮二

実践の裏付けのない学問は空理・空論。他方、学問の裏付けのない実践は真に患者の苦悩を解決する保証はなく、あてずっぽう。つまり、医療は学術と実践の両側面から成立することを基本大原則とする。

これらの総体から、どのような医療を人々に展開するのかという合理的政策が得られる。従って、これらの総体の裏付けのない政策から医療に対して一方的に方向性を決定することは、真に患者のためになるとは言えず、危険行為である。そのための防波堤として、学術としての医療を育成することが不可欠である。

国民皆保険制度は医療を自由経済市場に放置しないことを意味している。医療を商売道具とだけみなす安直な金銭誘惑の伝染を阻止するために、医療人の倫理とモラルという医の哲学が必須になる。高度で高額な医療という殺し文句は美味しい商売道具であるために、簡単に世界に伝染している。すでに日本の医療制度は世界に冠たる水準にあり、安直に海外から導入することは危険である。(世界一の平均寿命を持つ1億の民。新型コロナウイルスに対する日本の感染予防策は、今、世界のトレンド入りになっている。)

安全でない医療行為は古代ギリシャ時代の医療からも問題を指摘されている。ヒポクラテスは安全ではない医療行為は禁止する、と宣言した。その背景には、学術的根拠の薄い、安全でない安易な医療行為で商売をすることが流布しており、職業人のモラルでそれを防止する必要があった、と考えられる。

安全は必要であるが簡単ではない。人類は生存リスクに対して、様々な安全の知恵と技術を見出して繁栄している。

近年の医療の安全は21世紀にはじまったばかりのイベントで、長い歴史はない。つまり、それまで人類が安全を医療に問いかける行為は片手間の仕事であった。しかし、今日に医療界で流行している商業主義と権力志向にしたがって安全を追求する姿は、患者にとっても高い精神性を有する医療者にとっても、哀れである。

安全を総合学芸として落ち着いて検討する場を社会に保障することが、日本医療安全学会の本質的任務である、と考えている。第7回日本学術総会代表総会会長四柳東大教授の提唱されたスローガンである「温故知識」、つまり、落ち着いて医療の安全を皆でじっゆくりと検討しましょう、というメッセージに対して深く共感しました。

<http://jpsc.org/7thJPSCS/>